

2-5 熱中症リスクの評価手法の整理と構築

大項目	小項目	チェック	チェック項目	備考	
影響予測手法 及び予測結果	(影響予測手法) 現況の再現性		現況を再現できている	熱中症発生リスクマップは、観測値と比較すると概ね再現できているが、野外グラウンド等の屋間に人々がよく集まる施設等について、現況の再現が困難な点があった。	
		○	現況を概ね再現できているが、一部現況の再現が困難な点があった		
			現況再現を実施していない		
	(影響予測手法) 他地域での応用可能性	○		気候シナリオを入れ換えれば、他地域でも実施可能	気候シナリオのほかに気温データや熱中症患者搬送者数、各社会経済データ等を収集した上、データの入れ換えを実施すれば、他地域でも実施可能である。
				気候シナリオに加え、他の入力データを入れ換えれば、他地域でも実施可能	
				本調査の対象地域のみ利用できる	
	(影響予測手法) 应用到に必要な技術レベル	○		多くの行政担当者が自ら実施可能である	本調査のように、予測にあたって領域気象モデル(WRF)での計算や統計モデルの作成が必要となる場合には、研究者等の指導が必要であると考えられる。
				気候シナリオや影響予測モデルを扱うことができるコンサルタントや研究者のサポートが必要	
				研究者等の指導の下でなければ実施は難しい	
	(影響予測結果) 活用可能性	○		行政の活用の観点から、妥当と思われる予測結果が得られた	熱中症発生リスクマップは概ね妥当な結果であり、行政が地球温暖化対策実行計画等の策定に活用することが可能である。ただし、対策優先地域抽出の検討に関しては、さらに検証を実施することが望ましい。
				概ね妥当な結果と考えられ、行政で活用が可能であるが、さらに検証を実施することで、より精緻な予測結果が望める	
				行政で活用するためには、引き続き調査やデータ収集が必要	
適応オプション	適応策の妥当性		革新的な適応策を提示できた	分野の一般的な適応策の提示を行った上で、影響予測結果に対応した適応策を提示した。	
		○	影響予測結果に対応した適応策を提示した		
			影響予測結果と必ずしも一致しないものも含め、分野の一般的な適応策の提示を行った		
	導入可能性	○		他地域で実施・導入が可能である	調査対象地域だけではなく、他地域においても実施・導入が可能な適応オプションを検討した。
				本調査の対象地域でのみ実施・導入が可能である	
				本調査の対象地域で導入するには、さらなる調査、検討が必要である	
	他分野との関連性	○		他分野に相乗効果や副次効果が生じる	温暖化対策分野だけではなく、都市計画、都市緑化、健康関連分野などに相乗効果や副次的効果が期待できる。
				対象分野のみに効果がある	
				他分野にマイナスの影響を与える可能性があるため、導入の際に留意が必要である	
	適応策の多様性	○		適応オプションを多様な視点から5つ以上提案できた。	全国事業者が作成した適応オプションリストに基づいて、ハード面・ソフト面の両方面から検討・提案することができた。
				適応オプションを5つ以上提案できたが、調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られていた	
				調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られたため、提示できた適応オプションも限られた	

(※1) 現況の再現性とは、現在の状況を予測モデルが再現できている度合いのこと。通常、将来予測を実施する前に、モデルの妥当性を確認するため、現在の観測値等を利用して、予測モデルが現在の状況を再現できているか確認している。